テーマ：地域学校協働活動　対象：油木小学校　主催：油木協働支援センター

「なるほどだ！ワールド　おもちゃが動く謎を解け！」（学社連携・融合事業）

地域を学ぶ		地域でつながる	○	地域に還す	

１　学習プログラムの展開

日　程	場　所	学習・活動内容
１月２６日（金）	油木協働支援センター 分室「にしかわ」	○講師：橋本氏と連携 ○学校（教頭）と連携 「動くおもちゃ」デモンストレーションを行い、学校側と授業成立の有無を協議した。
２月　９日（金）	油木小学校	○学校（校長・教頭）と連携（講師：橋本氏・藤井氏） 「動くおもちゃ」デモンストレーションを行い、授業展開等に係る打ち合わせ及び、会場確認を行った。
３月１３日（水）	油木小学校	①　出前授業（６年生理科） 「動くおもちゃ」を実際に操作して、「動く」ための仕組み（エネルギー）を体験して学習し、小学校理科のまとめを行った。（２時間扱い）

パイプオルガン

スターリングエンジン

ルービックキューブ揃え機

玉乗りロボット

アルミ琴

パイプオルガン仕組みの説明

対　象	①　小学６年生
経　費	①　１４，０００円（７，０００円×２名）※税込み （油木協働支援センター町外在住講師謝金規定による）
連携先	油木小学校

問合せ先	〒７２０－１８１２ 広島県神石郡神石高原町油木乙１８７０－４ 電話：０８４７－８２－０７０１　ファクシミリ：０８４７－８２－２２２８

２　講座設定の理由（学習の目的）

小学校生活科・理科学習で学ぶ「動くための動力（エネルギー：風・水・温度・気圧・電磁石等）」のまとめとして、「手作りの動くおもちゃ」の実験を通じて「動力」の仕組みを学習し、主体的に問題解決をしようとする態度を養う。

また、生涯学習を通じて学習成果を地域社会に還元したいという地域学習者の考えを尊重し機会を設定することで、「生涯学習の理念」（教育基本法第３条）を具現化するとともに、学校教育と社会教育の連携・融合の重要性を喚起する。

３　学習目標

□児童

〇小学校生活科・理科学習（エネルギー）のまとめとして、中学校理科学習への発展的意欲付けとする。

〇「動くおもちゃ」を通じて、「理科的分野」だけではなく「技術的分野（プログラミング・設計・加工等）」「図工的分野（感性・創造力等）」「音楽的分野（演奏等）」等、将来的に多角・多面的な分野への興味・関心を持たせる。

□学校

〇学社連携・融合の取り組みを通じて、「社会教育（生涯学習）」への理解を深める。

□指導者（講師）

〇教育に対する関心や、生きがい・やる気・充実感等の向上を図る。

４　事前に必要な知識や準備物

〇「授業」として扱えるのか、「相応しい」ものなのか（内容・展開・準備物等）の学校との協議・連携。

〇「授業展開」時の役割分担（担任・講師）の確認。

〇指導者（講師）の思う授業展開が可能かどうか、事前の授業教室（施設・設備等）の確認。

５　留意点

〇搬入・準備に時間がかかるため、３時間（１時間準備、２時間授業）の設定をする。

〇２人体制をとり、指導者（講師）に対して補助担当者が時間配分等の声かけをする。（内容が盛りだくさんあるため、中途半端に終わらないように）

〇見る・体験する・考える等、活動の時間をはっきりと設定する。

〇専門的知識・用語について、わかりやすい言い換えも必要である。（学年に応じて）

６　成　果

〇指導者（講師）が、退職後に独学で研究・製作した「動くおもちゃ」を教材として使用したことにより、授業を通じて生涯学習の成果を適切に生かすことができた。（生涯学習の理念）また、授業後の児童の感想や学校側の評価も含めて、学習目標が達成できたのではないか。

〇学校管理職（校長・教頭）が本計画に積極的であったため、全面的な協力を得ること

ができた。（教材の事前デモンストレーションの実施）
〇教職員も授業を参観することで、地域活動者の存在・人材の活用による授業の広がり等を学ぶことができた。
〇実物教材に対する説明を画像も使用して行ったため、「触れる」「見る」「聞く」ことでさらに理解が深まった。（特に全員が「触れる」ことで、興味・関心が増した）
〇他市町の視察もあり、本事業が地域を越えて広がる期待がある。（講師の交換出前授業の企画等）

７　課　題

□全体を通して
〇生涯学習・社会教育について、町担当部局の関心・理解（今回は学社連携・融合事業について）が必要である。
〇生涯学習・社会教育について、学校側（教職員）の理解が重要であり、日頃から学校との積極的な交流や情報交換が必要である。
□本事業を通して
〇少人数（７名）だったため、全員が何らかの形で「動くおもちゃ」を実際に操作し触れて学ぶことができたが、対象人数が多い場合の授業の進め方を検討する必要がある。（全員が係われる工夫）
〇今回は６年生卒業前にも関わらず授業設定の段取りができたが、実施の時期・日程等については余裕を持ったスケジュールが必要である。（学校側の都合等）
〇年度途中（３学期）の実施となったが、予算にゆとりがあったため講師への報償費を準備できた。しかし、今後は今回のような「学社連携・融合」事業開催を想定して予め予算計上をしておく必要がある。
〇指導者（講師）に対して学校の運営方針・教育内容等を連携して、指導面で逸脱のないように協力を得ることが必要である。

８　今後に向けて

〇学校への生涯学習・社会教育の情報提供を進めると共に、学校側からの情報やニーズを把握するために連携を図る。
〇地域人材・教材の発掘をしていくと共に、「学社連携・融合」事業の意義を周知・理解してもらい協力体制を整える。
〇指導者（講師）の「教育に対する関心や、生きがい・やる気・充実感等」の向上を図る。（成果を適切に生かす…認められることで、さらに次のステージへ）
〇広報紙・ＨＰ等で取り組みを公開し、情報を発信していく。